

KING HOUNDEKPKINKOU

キング・ハウンドケピンク



“Ceramically” Yours,

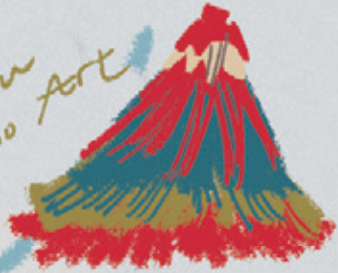
メールの最後、親愛を込めてキングはこう書きます。
本人がいつでも口にするのは、僕はあくまで「セラミスト」だという立場。キングはその作品づくりで、
あくまで土という材料に誠実に、世界のあらゆる表現の歴史を出合わせているのです。
彼の陶芸作家としてのキャリアを追いながら、彼が繋ぐ「やきもの世界」を旅してみましよう。

Contemporary African Art



土で繋ぐ、

Benin Voodoo Art



Bizen

Shigaraki



Art Pottery



キング・ハウンドケピンクって何 ???

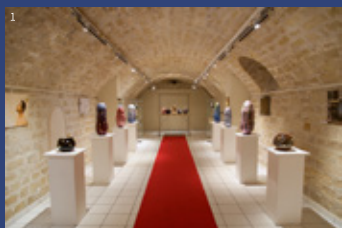
ベナン系フランス人の陶芸作家であるキングは、アフリカ現代美術シーンで注目を集め、日本の陶芸に学び、欧米のセラミック・アートの文脈でも評価されてきました。「芸術」、「やきもの」、「工芸」……あるいは、「備前焼」、「アフリカ美術」、「フレンチ・セラミック」……。今まで用意されてきた、芸術を説明するための言葉でも、地域の由来を語る区切りでも間に合わない存在であるキング。グローバルだけど地域に深く根差す、彼の作品は、何なのでしょう？

境を越える

パリ、アフリカ現代美術シーンを挑発する

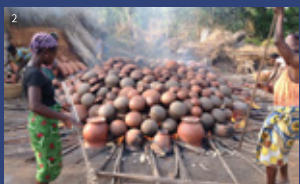
キングは、セーヌ川のほとりにあるヴァロワというギャラリーを拠点に、近年勢いを持つアフリカ現代美術シーンを駆け抜けてきました

2015年、20代半ばで会社員から転身しアーティストデビューしたキング。異例の速さで活躍の場を広げている。初期の活動を加速させた鍵は、**パリのギャラリー・ヴァロワ**との関係だ。ヴァロワは、ペナン系アーティストを多数抱え、アフリカ現代美術シーンで積極的にキングを紹介してきた。ギャラリーのペナンへの取り組みは、元々彫刻などの美術商として成功していたロバート・ヴァロワが、NGOと共にペナンに教育文化センターを建てたことから始まり、現在は美術館も併設される。



ギャラリー・ヴァロワでの作品展示風景

キングの両親はペナン出身であるものの、彼自身アーティストになるまでペナンの陶芸についてよく知らなかったが、センターの支援でセという村に滞在し現地の焼きものも学んだ。さらに、ペナンと日本の窯業地の土を混ぜて作品を焼き上げるというプロジェクト「**Terres Jumelles: 双つの土**」も続けている。



ペナンと備前を土で結んだTB Project (2016)

日本ではあまり知られていないが、**アフリカ現代美術**のシーンが勢いを増している。大きなきっかけと言われているのが1989年の「**大地の魔術師たち**」展(パリ・ポンピドゥーセンター)だ。従来、アフリカ美術といえば、宗教的な祭具や土産物の工芸で、美術館ではなく人類学博物館にあるものだった。同時代に生きるアフリカ人の表現はそれまでのイメージを塗り替え、また様々な議論を喚起し、90年代には世界各国の美術館で展示が相次いだ。アフリカ大陸内でも、**ダカール・ビエンナーレ**など、現代美術のイベントが発展を続けてきた。2018年までには



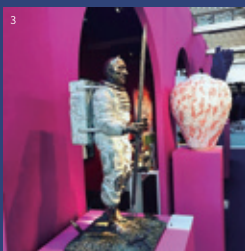
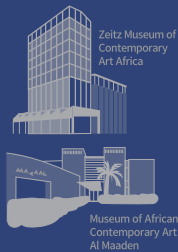
1989 "Magiciens de la Terre"

モロッコと南アフリカにアフリカ現代美術のための巨大な美術館が相次いで建った。

欧米では専門のギャラリーが増え、2010年代に入って世界規模の巨大アートフェアが誕生。ロンドン・ニューヨーク・マラケシュで開催される**1-54**やパリの**AKAA** (Also Known As Africa) では、キングの作品も毎年のように出品された。2018年にはニューヨークのMOMAでアフリカ人作家としては初となる**Body Isek**

Kinglezの個展が開かれた。ペナンでは、ヴァロワ以外にも、前大統領の娘が受け継ぐ**Zinsou財団**が現代美術館を運営し教育普及にも力を入れており、2014年には高松宮殿下記念世界文化賞で表彰を受けた。キングの作品は、世界規模で起きている大きなブームを覗く窓になるのだ。

しかし、この巨大なブームの中で、キングの存在は特殊である。自身も「アフリカ美術じゃない、あくまで**クレイワーク**なんだ。」と繰り返す。アフリカ現代美術は、「プリミティブな」偏見と戦い、「工芸」というカテゴリーから逃げてきた。一方でアフリカのアイデンティティも捨てられない。「**西洋に恥ずかしくない**」と「**アフリカらしさ**」の中で、**アフリカ現代美術は葛藤**している。実は同じ葛藤を、キングが学んだ日本の工芸も共有している。日本でも近代化と共に「アート」という言葉を輸入し、「美術」と翻訳し、自分たちがもともと持っていた表現を、その枠にあてはめ、あるものは野蛮であると切り捨てながら「日本美術」を作ってきた。そして実は西洋でも、辺境に追いやられた表現があり、実用から発展したセラミックも、その一つである。これらが合流した、キングの「アート」は、アフリカVS西洋、「美術」VS「非美術」といった境界は絶対的ではなく、状況によって揺らぐことを提示する。アフリカ現代美術に、こうした視点を持ち込む彼の作品は、ある意味挑発的でさえある。



AKAA2018より展示風景:
左手前「Piango Piango」
/ Jorge Luis Miranda Carracedo
右奥「GRANCE VASE MOTHERLY HUG JAPON」
/ King Houndekpinkou

通底する日本の技と形

日本の陶芸家に出会い、その技をまなんだキング。特に、備前焼の無釉焼き締め技法を再解釈し、現在の彼の表現と活動の根幹をなすスタイルを確立しました

キングがパリで陶芸を初めて学んだのは、パリのマレ地区にある**ギャラリー・ハヤサキ**。日本人のオーナーがギャラリーと陶芸教室を営む施設で、彼は圧倒的な才能を見せ、プロを目指す。そしてハヤサキの一同と訪れたフランス中部チュイルリー・ドゥ・プリニーにて、**備前焼**の作家でありパリなどで広く創作・普及活動を行う**澁田寿昭**に出会う。澁田は、陶器の産地だったこの地に**穴窯**の技術を伝えて来ている。この出会いが、彼の芸術性に圧倒的な影響を与える。



Anagama Kiln



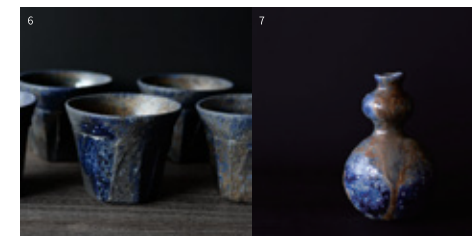
上:
澁田の作品、備前の工房にて

左:
フランスで行われたジャポニスム2018でも備前窯(穴窯)ワークショップが行われた

「無釉焼き締め」の世界: 窯変が生む多彩な表現

西洋が憧れ真似をしてきた東アジアの焼きものといえば、輝くような滑らかな肌の**白磁**や**精緻な絵付けの施された陶磁器**が代表的だ。一方、キングが出会った備前焼は、釉薬を一切使用せず高温で焼き上げる「**焼き締め**」陶。桃山時代に茶陶を生産し、「**侘び寂び**」「**枯れ冷え**」といった茶道の哲学を体現するとして愛された。釉薬を使わないので、煙の当たり方や温度の違いに

よる**土の変容**だけが、完成品のテクスチャを決める。**素材の土**から粒の粗さなどを考えブレンドし、窯の構造による煙の来る方向を意識して**窯の詰め方**を決める。窯の中で灰がかぶると、融けてくっついたり爛れたりして表面に装飾がかかる。**燃料の量**と**空気の量**を、焚き方でコントロールし、風味に違いを出す。ここまでしっかり計算しながらも、**最期は窯の中の「自然現象」**に仕上がりを委ねるので、一つとして同じ陶器は生まれない。キングは、この備前焼の無釉焼き締めの製造過程を、彼なりに再構成して模倣した。



澁田も焼き締めを用いて多彩な表現に挑戦している(瑠璃備前)

キングの製法

まず土台となる基本の壺の形を作ったあと、さらに土をぶつける。捻り、切り裂いて形を「壊す」。一度焼き上げた後、もう一つの大きな特徴である彩度の高い釉薬を何色も施す。敢えて濃い釉薬を用いて、垂れや重なりによって触感もざらざらぼこぼこさせてしまう。キングの制作を貫くのは、「**偶然性**」を愛するという意図である。陶土も釉薬も、後から「**足す**」技法を用いるのは、それが偶然の形や色を生むからだ。**元のクリアに「作った」ライン**を敢えて崩して、「**なった形**」で焼き上げる。キングは備前焼について「クリアなカタチが、焼き上げると、灰がついたり、爛れたり、掠れや傷ができたりにして、形が乱れる。それでも、基礎の構造に基づいて、作品全体は一つのまとまりを保っている」ことを本質と捉えた。「**人生に似ていると思った**。様々な経験によって苦しんだり削られたりしても、美しく立っている」そういう人生観を伝える、希望の作風だという。日本の陶芸の、しかも焼き締め陶を、製作過程まで踏み込んで本質的に理解し、その精神の自分なりの再解釈を達成した。キングの唯一無二の仕事である。

世界のセラミック・アートが呼んでいる

西洋にも「やきもの」の歴史があり、ファインアートと並ぶ立ち位置を作ってきました！キングの表現は、欧米のセラミック・アートの文脈でも高い評価を受け始めています

世界的なアーティストのアヴァンギャルドな陶芸アートを見ると、日本人はなんだか気後れて「日本の陶芸は世界的にみてまだまだで、欧米ではすでに…」みたいなことを言いたくなってしまいが、西洋やきものの歴史はアジアにずっと影響を受け続けてきた。17世紀、景德鎮や伊万里焼の白磁は、薄手で透き通った色が人気を博し、「白い金」とよばれ高値で輸入された。これを自国で作れたら…！という王侯たちの競争の末、1709年ザクセンのアウグスト強王のもと、錬金術師ヨハン・フリードリッヒ・ベトガーが白磁（ポーセラン）の焼成に成功！現在まで伝統を受け継ぐ、マイセンの工場を設立した。（なお彼は技術の漏洩を恐れた王によって監禁生活を余儀なくされ、病のうちに早逝した。特許という概念の重要性を思う。）18世紀後半には仏・ルイ15世がオーナーのセブルの工場に中心が移る。



Johann Friedrich Böttger

こうして王立・国立の近代的な窯業工場が成長する一方で、機械化・大量生産に反発し「芸術としての陶芸」を目指す流れが生まれる。19世紀後半、イギリスのアーツアンドクラフツ運動は、産業革命の時代、「使うためのものを効率的に生産」ではなく、陶芸の用途性以外に目を向け、個人の表現としての可能性を追求した。フランスでもアールヌーボーの流れでこの信念が共有され、芸術陶器が始まる。1878年のパリ万博を契機にジャポニスムが流行するため、ここでも日本の陶磁器が刺激となった。

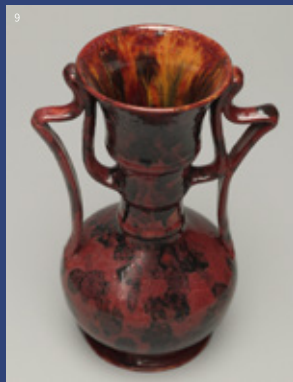


「Cache-pot (1886)」 / Ernest Chaplet
オルセー美術館蔵

前衛芸術としての陶芸

さらにフランスでは1930年代、装飾を抑えた「質素」な美を追求する前衛陶芸がはじまる。そこでお手本こそ、日本の焼き締め陶器だった。そして、あのピカソも！1950年代以降、画家としての才能をその装飾に遺憾なく発揮し、前衛陶芸に多大なる足跡を残した。

さらに60年代、ポップアートの旗手、アンディ・ウォーホルやリキテンスタインが絶賛したアメリカ人陶芸家がいた。ジョージ・オー（1857-1918）、奇怪な行動と独特の造形で知られるミシシッピの「狂人陶工」だ。彼の作品は生前アメリカの陶芸界では理解されなかったが、むしろ死後、それが幸いして、やきものという枠にとられず、純粹な前衛芸術として評価されたのだ。2017年キングは、米国の著名な陶芸評論家ガース・クラークに見いだされ、このオーの創作精神を感じると、彼の作品と並び展示された。以降セラミックシーンで、ピーター・ヴォーコス、アイ・ウェイウェイら世界的な作家と並ぶ機会も増えた。オーは生前、釉薬による発色の技術は評価されても、形を捻ったりする造形については「ゲテモノ扱い」に終わった。キングも、鮮やかな色に初めは目を奪われるけれど、「形」への美意識の陶土による実現に本質がある。キングの土への向き合い方への注目と評価は、今後ますます高まるだろう。



「Vase (ca 1900)」 / George E. Ohr
ブルックリン美術館蔵

例えば、たぬぎだけじゃない「信楽焼」

キングが今回、造形精神のふるさとして日本のアートシーンにデビューするのは、信楽での製作がきっかけでした。現在の日本の陶芸が持つ包括性も、彼の作品は象徴しています

さて、日本の陶芸は今どうなっているのか。もちろん、自らの歴史を生かして、技術や表現の新しい挑戦を続けてきた。しかし、それを「日本の陶芸もアートに高められた」と説明してしまうのは一面的であろう。むしろ「陶芸」が、伝統から、工業デザイン、アヴァンギャルドまで、全てを包み込む言葉であるといえる。例として、みんなのギャラリーが初めて購入しアートフェア東京2019の出品の契機となった「The Sea Widow II」の製作経緯を紹介する。この青い壺は、キングがたぬぎの置物で有名な信楽で、「滋賀県立陶芸の森」の滞在型プログラム、アーティスト・イン・レジデンスに参加して製作されたものである。このレジデンスのために、世界中のアーティストや、さらに国内からも奈良美智のような有名作家が滋賀の田舎に集まり、設備と横のつながりに恵まれた環境で製作に打ち込む。

■ これまで滋賀県立陶芸の森に滞在した陶芸家等の出身国(50ヶ国・2017年3月時点)



fig.a

この作品の一番の特徴は、大きさ。従来のキングの作品よりずっと大きく、そして土をぶつけるのでかなり重い。この製作を可能にしたのは、スタジオの広さと窯までの近さおよび、2mの高さを持つ国内最大級のカン。信楽焼の「大物づくり」の伝統を引き継ぎ意図で設置された。信楽も桃山茶陶で知られるが、同時に伝統的に生活のための大壺や甕を作ってきた。明治以降も窯業試験場という機関で、意図的に大物ロクロ技法を伝えて産地の強みにしてきた。明治期は、絹糸生産の際に甕を煮る「糸取り鍋」で、次いで火鉢で全国シェア一位を取り、戦前は好景気に沸いた。有名な信楽タヌキにも大物づくりの技術が生きている。日本の陶芸は、伝統工芸でもあるが、「殖産興業」の対象ともなったため、工業とも芸術とも区切りきれない包括性を持って今まで歩んできた。



上：
滋賀県立陶芸の森で製作された「The Sea Widow II」

左：
The Sea Widow IIの梱包。大型の重い作品を運搬する工夫にも産地の知恵が生きている

信楽の窯業試験場での研究開発は、デザインや芸術との相互交流がずっとあった。例えば、バーナード・リーチとの交流で知られる濱田庄司は信楽で陶芸家として作品を作りながら、工場プロダクトデザインに携わった。反対に、大物陶器を焼くことのできる技術を頼りに、日本の現代作家も信楽で芸術作品を作ってきた。代表的なのは何といっても岡本太郎！1970年の大阪万博の象徴であるオブジェ、太陽の塔の裏側の黒い顔は信楽製である。ロバート・ラウシェンバークや、横尾忠則の作品も、信楽で作られた陶板で大規模作品を作ってきた。紅白歌合戦で米津玄師がLemonを歌った、大塚美術館の複製画も、信楽の大塚オーミ陶業の陶板でできている。桃山茶陶から見ればたぬぎだって伝統的な信楽焼ではない…と厳しく考えることもできるが、たぬぎが信楽焼ならばこれらも全て「信楽焼」である。キングの作品は、日本ではまだなじみのない力強いアートシーンに接続しながら、私たちに「陶芸」という窓を開いてくれている。我々は「これも陶芸である」と自分の言葉で語る事ができるのだ。



King Houndekpinkou

<http://www.kinghoundekpinkou.com/contact>
info@kinghoundekpinkou.com

みんなのギャラリー

〒110-0015 東京都台東区東上野4-14-3 2F

Tel/Fax: 03-6268-9658 Email: tamori@minnanogallery.com

HP: <https://www.minnanogallery.com/>

Facebook: <https://www.facebook.com/minnanog/>

Instagram: https://www.instagram.com/minnano_gallery_tokyo/

解説: 中村融子

(京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科 アフリカ地域研究専攻博士課程)

Instagram: <https://www.instagram.com/ottk128/>

パンフレットデザイン・イラスト: 高石瑞希

HP: <https://www.mizukitakaishi.com>